

自然誌 **だじり** 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 107 号

2016年 3月

九十九里浜のシロチドリが雲出川河口周辺で越冬

これまで敬遠していたシロチドリの観察と撮影ですが、足環を付けたシロチドリが雲出川河口に来ている、個体識別ができるので羽衣の変化が観察しやすいという内容のブログ記事をきっかけに開始しました。しばらく続けていた昨年12月中旬、偶然に撮影できた幸運な出会いを紹介します。

まずは、シロチドリの足環を見られるかどうか試してみようと潮時を見計らって何度か足を運びました。干潟で動き回るハマシギやシロチドリの群から足輪を付けたシロチドリを見つけるには根気がいります。北風の中で堤防からスコープを覗けるのは短時間、小さな鳥の動きに慣れるまでは車中に持ち込んで探しました。足環を付けた鳥を見つけられるようになって、小さな鳥の羽衣を見るというレベルではなく、証拠写真さえも撮れません。中州の干潟で群を待つしか手はないとカメラなどをザックに詰め、三脚とスコープは流木の陰に据えて潮が満ちてくるのを待っていました。

私がいる所から50mほどの干潟へ来た群に足環付きのシロチドリを見つけ、懸命にデジスコ撮影をしました。しばらくすると群が休息を始めて動きが少なくなり、倍率をあげて写すことができたので再生してみると、1枚の写真に足環を付けたシロチドリ2羽が前後に並んで写っていました。前にいる足環を付けた鳥に気をとられて、後方にも足環を付けた鳥がいることに気が付かなかったのです。再び撮影し始めたとき、マガモが2羽のシロチドリの間を歩いたので移動してしまい、幸運な出会いは数分で終わりましたが、写真を山階鳥類研究所（千葉県我孫子市）に送ると次のような放鳥記録が届きました。

黄/白の個体は2015年5月28日に千葉県九十九里町の作田で放鳥されています。雲出川河口からは10月10日にも観察記録が来ています。データベースには20150312のIDで登録いたしました。橙/橙の個体は2015年7月2日に同じく作田で放鳥されています。この個体は9月15日に九十九里で再観察された後、10月18日に雲出川から観察記録が来ています。データベースには20150313で登録いたしました。



橙/橙の標識をつけたシロチドリ

2羽とも繁殖地と越冬地がはっきりしたことになります。

前記のブログには本年2月初旬に撮影された鮮明な足環付きシロチドリの写真が載っていました。黄/白の足環を付けた個体はメス、橙/橙の個体はオスでした。雲出川河口のシロチドリの一部は九十九里浜周辺から来ているのは既知のことでしょうが、私にとっては新鮮な体験でしたし、他のシロチドリ達の出身地も知りたいと新たな興味も沸いてきます。

（今堀聖史：津市久居小野辺町 1454 - 30）

今村功氏の遺した双翅目昆虫標本

篠 木 善 重

今村功昆虫標本目録第1集が2014年3月に桑名市教育委員会から発行された。故・今村功氏の親族から桑名市に寄贈された日本産昆虫標本約500種、約3600点の目録である。このなかには双翅目昆虫42標本が記録されている。42標本のうち、三重県レッドデータブック2015においてミズアブが絶滅危惧Ⅱ類(VU)に、アカツリアブモドキが情報不足(DD)にそれぞれ選定されている。また、今村(1980)が伊勢外宮から記録したナガノハマダラミバエはこれまで三重県唯一の記録であった。筆者は3種とも未だ採集したことがなく、なかでもアカツリアブモドキとナガノハマダラミバエの2種はこれまで標本すら見たことがなかったので、目録第1集を入手するやいなや彼らに会いたくなった。早速、桑名市文化課にお願いし、2016年1月、今村氏の教え子で、今村標本の整理・管理を行っている鈴木淳次さんと保管場所のふるさと多度文学館で落ち合った。

今村(1986)が記録したアカツリアブモドキは、赤錆色の翅がまるでベルベットのような感触(触ってはいないが)を感じさせ、感動した。ナガノハマダラミバエは翅基半の斑紋が黄褐色(市田1998)となるのだが、標本はそのように見えなかったので、日を改めて同定しなおすことにした。2週間後、鈴木さんに再び御厄介になり、ドイツ箱に収められている標本を調べたところ、ナガノハマダラミバエではなく、胸背の黒紋発達が悪い(市田1998)という特徴のあるキバラハマダラミバエ *Acanthonevra amurensis* (Portschinsky) であることが判明した。今村(1980)は採集日を12-IX、1976と記録しているが、標本の採集ラベルにはIXではなく、NOVと書かれていたことから、12-XI、1976が正しい採集日と思われ、桑名市(2014)もそのように記録している。

よって、ナガノハマダラミバエの2記録(今村1980、桑名市2014)を抹消するとともに、三重県からの既知記録が見当たらないこのキバラハマダラミバエ(写真)を、県初記録として報告する。なお、本種は今村(1980)が記録した当時は日本から未記録であったため、類似の斑紋を持ったナガノハマダラミバエと誤同定されたのであろう。



写真 キバラハマダラミバエ

記録

キバラハマダラミバエ *Acanthonevra amurensis* (Portschinsky, 1892)；伊勢市豊川町伊勢神宮外宮，12-XI、1976，1頭，今村功採集(写真)。

謝辞

今村標本の閲覧にあたりご協力いただいた鈴木淳次氏ならびに桑名市教育委員会、目録第1集を恵与いただいた生川展行氏に御礼申し上げます。

文献

市田忠夫、1998、安直同定 絵合わせ日本本土のミバエ、双翅目談話会第三回総会資料、p.1-25。

今村功、1980、伊勢神宮境内地のオガタマノキの樹上に生息する節足動物—とくにミカドアゲハに関連して—。

神宮境内地昆虫調査報告書、神宮司庁、p.469-480。

今村功、1986、三重県で再度記録したアカツリアブモドキ、ひらくら、30(3)、65。

桑名市教育委員会、2014、双翅目、今村功昆虫標本目録第1集、桑名市教育委員会、p.77-79。

(しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1)

松阪ベルファームで湿地の管理始めましたー協力者を募集しますー

谷 口 雅 仁

昨年3月末に退職したのを機に松阪市四郷池の湿地の管理を始めました。四郷池は松阪農業公園ベルファーム内のため池で、周辺にはヒメナエやコキンバイザサ、フナバラソウなどの希少な植物が多く残っています。本紙67号の山路武夫さんの報告によれば、三重県レッドデータブックに記載されている植物が16種確認されているとのこと。なかでも四郷池南西部に広がる2000平米ほどの湿地(限りなく草地に近い)は、前述のヒメナエやコキンバイザサの他にもイシモチソウ、クロミノニシゴリ、ハルリンドウ、イヌセンブリなどが見られる貴重な場所となっています。

この湿地の管理は、これまで地元の水利組合が実施してきており、年1回の草刈りが行われていましたが、昔に比べるとササやススキ、ヨシなどが随分増えてきており、十分な管理が行われているとは言えないような状況でした。そこで、水利組合に申し出て昨年6月から管理を引き受けたわけですが、私も湿地の管理について専門の知識があるわけでもありませんので、とりあえず月1回軽めの草刈りをする程度で様子を見ることにしました。そして、11月にはクロミノニシゴリなどを残して短く草刈りし、これまで水利組合がしてきたように野焼きも行いました。しかし、これは1か月早かったと感じました。イヌセンブリやリンドウなどはまだ花が終わっていない時期だったからです。植物にあまり詳しくないため、クロミノニシゴリとイソノキを間違えていたりもしましたが、コキンバイザサが野焼きや刈込みにかなり強いことなどを知ることができました。

去年はとりあえず一人で管理をしてみましたが、今年は興味を持たれた皆様にもご協力いただいて管理を続けていきたいと考えています。湿地の管理や植物の専門知識をお持ちの方のご指導もいただければ有難いです。もちろん「ひやかし」もけっこうです。ぜひいちど四郷池にお越し下さい。

今年の管理は、**4月13日(水)から毎月第2水曜日**(ベルファームの定休日)に実施する予定です。作業時間は9時から16時頃まで。ご協力いただける方は実施日の前日までに私宛メール(gajin@mctv.ne.jp)又は電話(090-8556-9801)で連絡をお願いします。ベルファームの定休日で入口が閉鎖されていますので、入り方をご案内いたします。



1 手入れ前の湿地全景 (6月10日), 2 ハルリンドウ (4月20日), 3 イシモチソウ (5月1日), 4 刈り込みに耐えて咲くコキンバイザサ (8月27日), 5 イヌセンブリ (11月10日), 6 野焼きのようす (11月11日)

(たにぐち まさひと: 松阪市小阿坂町4038-2)

坂手島に行こう

中 西 元 男

伊勢湾口，鳥羽市の離島は神島，答志島，菅島が三重県レッドデータブック2005による希少野生生物主要生息地とされており，三重自然誌の会では会誌「三重自然誌」13号，11号，7号にそれぞれ調査報告を掲載しているが，残る一つの地域有人島，坂手島に関してはまだ調査実績がない。

志摩半島本体鳥羽市街に最も近く海上距離約1.8km，面積0.51km²で4島中最少のこの島は，その位置，様相からみていかにも面白味に欠けるためか，自然科学調査対象として顧みられることが少ない。昆虫類に関しては過去の記録として三重昆虫談話会（三重昆）が2008～2010年に行った志摩半島地域調査時のチョウ，トンボ以外にみるべきものがないのが現状で，自然誌の会でも2014年に共同調査の提案があったものの実施してみたら参加人員が少なかったり，誰も名乗りでなくて流会になったりの散々不人気であった。

ではあるものの，どんな場所であれみるに足る自然誌的事象がない訳ではないので，比較的資料が豊富なチョウを材料に，坂手島の特異性を紹介して調査のはずみとしたい。頭からバカにしないで一度は足を運び調査してほしい。

＊

坂手島から記録されるチョウは，三重昆の調査開始以前21種であったが，志摩半島昆虫調査でキマダラセセリ，ツマキチョウ，サツマジミ，メスグロヒョウモン，アサマイチモンジなど21種が追加されいっきに産出数倍増42種となり，その後ダイミョウセセリ，ホソバセセリ2種が増え現在44種。これは同地域の，より面積が大きい菅島42種を抜き，最大の答志島47種に次いで2番目である。面積1km²以下同士の神島36種に比べると約1.2倍の蝶相規模ということになる。

島嶼の昆虫産出種数には，面積の大きな島は小さな島より，本土に近い側が離れたものより多くなるという傾向がみられ，坂手島のチョウ産出種数がこの地域離島内で高順位なのは，明らかにこの島が一番半島本体に近いという優位性によると考えられる。なお，伊勢湾口島嶼は三重県側志摩半島から遠ざかるにつれ愛知県本土に近づくという位置関係にあるが，最も愛知県寄りの神島は伊良湖岬から海上距離約4kmで坂手，志摩半島間より倍以上離れている。しかも神島，伊良湖間はこの海域で最も深度の深い伊良湖水道で隔てられており，恐らく伊勢湾口の島々が本土から離れた際真っ先に分断されたと考えられる。しかも答志島と神島の間はこの地域4島間最も海域が広く，この点からも坂手島と神島では島としての孤立度は圧倒的に神島の方が高いと考えられる。

伊勢湾口島嶼中神島のチョウ相の大きな特徴は，志摩半島側3島共通産出でしかも個体数も特に少ない種が欠けることにあり，ジャコウアゲハ，コムスジ（1回記録あり），ヒメウラナミジャノメ，ヒカゲチョウ，ヒメジャノメ（1回記録あり），コジャノメがいない。特にタテハチョウ科ジャノメチョウ類は，この地域産6種中クロコノマチョウ1種しかみられず，この種がジャノメチョウ類として異例の高機動性，移動能力を有するものであることから，基本的にジャノメのいない島といってもよい状況である。三重県全域にごく普通，ちょっと街を外れれば個体数の多いヒメウラナミジャノメが市街地に飛来せず，筆者宅の庭での20年近い観察で1度も確認できないことからみて，この類は生息地を離れ空間を遠く飛び渡って行くことが苦手で，答志，神島間の海域，伊良湖水道を飛び越え神島に入ることができない（あるいはなんらかの原因で島内個体群が絶滅した後の補完再侵入ができない？）でいるものと考えられる。

坂手島ではこれら神島に欠ける6種がいずれも記録され，比較的普通にみられる。しかもヒカゲチョ

ウは他の大きな2島、答志島、菅島に比べてはるかに個体数が多く、ジャノメチョウ類の1種サトキマダラヒカゲは坂手からしか記録がない。セセリチョウ科のダイミョウセセリ、タテハチョウ科ゴマダラチョウも4島中坂手のみの記録種であり、メスグロヒョウモンは越夏後拡散期には菅島でもみられるが、初夏発生時の記録は今のところ坂手のみである。

伊勢湾口離島部で記録される種は現在57種であるが、うち坂手島未知なもののうち答志島から記録されるウラゴマダラシジミ、アカシジミ、ミズイロオナガシジミ、ミドリシジミといった低地丘陵性ミドリシジミ類は、坂手の水田農耕が失われて久しく（あるいはもともと水田がなかった？）生息基盤となる環境がなく産しないと思われる。またかつて人里に普通で、現在は県単位絶滅危惧Ⅱ類に衰退したツマグロキチョウの産出はほぼ絶望的。この地域島嶼では迷蝶のオナガアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、スジグロカバマダラ、クロマダラソテツシジミは、近年も飛来が続く後1種以外の再記録困難。その他の種も記録の少ないものばかりで、正直チョウに関してこの島のファウナは三重県で調べ尽くした感が強い（なにしろ2年半ほどの期間に、この小さい島へ四季を通じ22回調査に行った）。が、その結果明らかになった坂手島の特徴に照らして、未調査の分野を調べ他の3島、なかでも規模的に相対で位置環境の異なる神島との比較は、いろいろと興味深い問題提起があるように思われる。

さあ、みんなで坂手島に行こう！

（なかにし もとお：松阪市新町959）



坂手島のお盆（2014年8月16日）一軒ずつ角々にお札、供養花と仏チョコが供えられている。花を挿すピンはウイスキーやジュースの空き瓶だったりする。

庭・畑の草抜きはえらいが面白い

市川正人

田畑を持てる者の悩み、この数年間一年を通して畑の草抜き（除草剤・耕耘機不使用、一切手取り）に明け暮れています。キク、コスモス、ヤグルマギク、ヒャクニチソウなどの花がそれなりに季節を彩りますが、抜いても直ぐに生えてくるのが雑草でキリがありません。しかし、なかには気になる種類も混じり、マンネリ化しがちな作業の中、その出現に癒されます。

下にあげた植物は、鈴鹿市池田町のあるわが家の庭と畑に周辺やどこからともなく侵入した雑草・雑木群です。ほとんどがどこにでも見られるごく普通の庭や畑の雑草・雑木ですが、このような環境ではあまりなじみのない侵入種の生育も確認できました。これらの「ちょっと気になる種」にはカッコ内に確認場所やコメントを添えるとともに、数種については写真を掲載しました。

シダ植物：イヌカタヒバ（庭，帰化系統？） イヌケホシダ（庭・畑，帰化系統？） オニヤブソテツ カニクサ クサソテツ（畑，コゴミ） コヒロハハナヤスリ（庭） シケシダ スギナ セイヨウタマシダ トラノオシダ ヒメワラビ ベニシダ マツバラン（庭のトウギボウシ鉢植えに侵入，県南部では普通）

種子植物：アオツヅラフジ アカカタバミ アカメギシロ（木本） アキノエノコログサ アメリカタカサブロウ アメリカフウロ アレチヌスビトハギ アワゴケ（庭，常湿） イシミカワ イヌタデ イヌムギ ウスアカカタバミ ウマゴヤシ ウラジロチチコグサ ウリクサ エノキ（木本） エノコログサ オオアレ

チノギク オオイヌノフグリ オオバノトンボソウ（庭の築山海拔5m） オシロイバナ オッタチカタバミ
 オニタビラコ オヒシバ オランダミミナグサ カスマグサ カタバミ ギシギシ キバナムラサキ（畑，
 栽培逸出？） キュウリグサ クサイ クワクサ コケマンネングサ コキンバイザサの1種。（庭，種子繁殖
 旺盛，帰化系統？） コハコベ コメヒシバ コモチマンネングサ シソ ショカツサイ スズメノエンドウ
 スズメノカタビラ タカサゴユリ（今年は1月にも開花，普通は夏） タチイヌノフグリ タチツボスミレ
 タネツケバナ チガヤ チチコグサモドキ チドメグサ チリーアヤメ（庭，花茎約10cmの割には大きい花，
 南アメリカ原産） ツメクサ ツユクサ トウバナ トキワハゼ ドクダミ ナギナタガヤ ナンテン（木本）
 ニチナンオオバコ（畑，北アメリカ原産） ニワホコリ ニワホトトギス ヌカキビ ネズミムギ ノイバラ
 （木本） ノゲシ ノブドウ ノミノツヅリ ノミノフスマ ハナイバナ ハハコグサ ヒゴスミレ ヒナタ
 イノコヅチ ヒメコバンソウ ヒメジョオン ヒメムカシヨモギ ヒロハフウリンホオズキ ブタナ ヘクソ
 カズラ ホウチャクソウ ホトケノザ マグワ（木本） マツバウンラン マメアサガオ マルバツユクサ
 ミズヒキ ミツカドネギ ミツバ ミドリハコベ ムラサキカタバミ ムラサキケマン メヒシバ メマツヨ
 イグサ ヤエムグラ ヤツデ ヤハズエンドウ ヤブガラシ ヤブミョウガ ユリズイセン（アルストロメリ
 ア） ヨウシュヤマゴボウ ヨメナ ヨモギ

ここ数年間での確認種数は112種で，そのうち在来種は70種（62.5%），帰化種は42種（37.5%）と
 なっています．なお，経験的にこの中で特に根絶が難しいやっかいものは，スギナ，マルバツユクサ，
 クワクサ，オランダミミナグサ，コケマンネングサ，ツメクサ，ドクダミ，ヤブガラシ，カタバミ類，
 イネ科やキク科の各種です．

以上，貴重な紙面を潰してしまいましたが，意外に身近なところでも楽しめる自然を紹介しま
 した．最後に，長年にわたり三重県の植物関係にご尽力・貢献され，昨年逝去された岡与一氏をお悼
 みし，ご冥福をお祈り申し上げます．先生の胸乱姿を思い出します．



1 庭，2 畑，3 イヌカタヒバ（庭），4 イヌケホシダ（庭），5 マツバラン（庭の鉢植えに侵入），6 コキンバイ
 ザサの1種（庭）7 チリーアヤメ（庭），8 ニチナンオオバコ（畑），9 キバナムラサキ（畑）

（いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5 文化ハイツ 606）

鈴鹿青少年の森公園湿地—天然記念物指定に向けて

清水 善吉

鈴鹿青少年の森公園は鈴鹿サーキットの北隣にある都市公園です。その一角に1000m²程の湿地があり、毎冬草刈りを行うことにより湿地植物の保全をはかっています。草刈りに至った経緯については本誌87号（清水2011）で紹介しましたが、私の口が端緒となった感是否めず、活動に参加していただいている皆様には感謝しております。今年も1月20日に予定していましたが、当日は今冬一番の降雪となってしまう、24日に順延して実施しました(写真1)。今回は小型重機を用意していただき、長年の懸案であった湿地南半分の再生に着手することができました。



写真1 作業終了後に湿地の前で記念撮影（青少年センターボランティアの方々も参加）

この部分は、湿地全体からみると小高い丘になっており、我々が活動を始める2001年以前に刈った草が堆積して湿地植物の発芽が抑えられ、ヌマガヤ原になっていました。また、イヌツゲやノリウツギなどの樹木も侵入し、遷移の進行しているエリアでした(写真2)。それでも、歩くと地面はジュクジュクしていますし、昨年の活動で試しにスコップで草の堆積した表層をはがしたところ、秋にはシラタマホシクサが一気に発芽しましたので、湿地再生は可能であると判断していました。ただ、人力での作業には限界がありますので、管理者の鈴鹿青少年センターに重機での作業お願いし、表層をはがしを実施してもらいました（写真3）。

今後は、表層をはがした部分の植生調査の実施、検証をしながら、面積を拡大していく予定です。あわせて、侵入している樹木の伐採と林縁部に繁茂しているコシダ等の除去も行う必要があります。これらの植物がなくなることにより、湿地エリアが拡大するとともに湿地内の湧水量が幾分か増加し、遷移の進行も遅くなると期待しています。将来的には、人手を加えなくても湿地環境が維持できるようになれば理想です。

この湿地の植生は、近くにある「金生水沼沢植物群落」と比較しても遜色ありません。金生水沼沢は国の天然記念物に指定されていますので、こちらの湿地についても後背の林も含めて市や県の指定を行うことで将来的な保証が必要でしょう。幸いなことに、公園は県有地ですし保全体制もあることから、指定についてのハードルは高くないと思われます。いまの活動とあわせて、これからは天然記念物指定のとりくみも進めていきたいと考えています。



写真2 ヌマガヤ（左手）やコシダ（右手）の繁茂する湿地、中央背丈の低いのがシラタマホシクサ回復エリア。



写真3 重機で表層をはがしていく作業

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町 1386-17）

ミコアイサ46羽+αが1か所で越冬していた

今 堀 聖 史

ミコアイサは、県内では毎年越冬していますが個体数は少なく、一つの池で数羽のことがほとんどで10羽を超える群れは稀です。本年1月中旬にたくさんのミコアイサが来ているとの情報で、現地に着くなり個体数の多さにびっくりしました。ざっと30羽以上が数えられたので、写真で個体数を確かめようと撮りはじめましたが、絶えず入れかわり潜水して餌を捕っており全てを数えられる写真が撮れません。楕円形の池（長径400mほど）の広い範囲を群は潜水を繰り返しながら移動し、2群や3群になることもあって目的の写真は撮れませんでした。数日間通って撮った写真の中に最多46羽を写せたものがありました。撮影したとき潜水していた個体もいるでしょうから46羽+αの群（オス成鳥は10-11羽、メスと幼鳥で約40羽、2016年1月17日）でした。

今年のミコアイサ目撃情報は1月初旬からいくつかあり、大きな群もこの頃やってきたのではないかと推定しています。1月28日に20数羽を確認した後は、30日に8羽の群（オス1、メス・幼7）、31日6羽（幼鳥）、2月5日4羽（オス2、メス2）、7日は幼鳥1羽を見たのが最終でした。

場所は津市明神町、久居農林高諸戸山農場の北にある大釜池で、以前に家禽のバリケンが数年間いましたし、現在はコブハクチョウがいる池です。カモ類はマガモ、ハシビロガモが合わせて200羽ほど、オオバン20羽ほどがいます。池は丘陵地にあり、農地と雑木林に囲まれ周りに道路はなく、観察できる場所は堤だけなので鳥にとっては住み心地がいい環境だと思いますが、どこにでもあるような池です。ミコアイサの大きな群がなぜこの池に来たのか不思議ですが、カモ類2種の個体数が多いことからプランクトンが多くミコアイサの餌も豊富にあったと想像しています。

蛇足ですが、1月末に琵琶湖で約500羽のミコアイサが撮影されています。北上する群が終結していないのではないか、大釜池の群も混じっていたかもしれません。



ミコアイサの群れ

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

編集後記

1月20日、鈴鹿青少年の森公園湿地の草刈りに松阪の自宅を予定通りの時間に出発しましたが、津市河芸町あたりから積雪が多くなってきたので、延期を決定しました。松阪を出るときには積雪はほとんどなかったのですが、北勢の人から「今日は行くのは無理」との電話をもらったときには軟弱など内心しましたが、県南北で気候が違うことを実感しました。次号は6月発行予定です。北から南から、春の便りをお待ちしています（善）。

自然誌だより107号

発行日 2016年3月10日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp